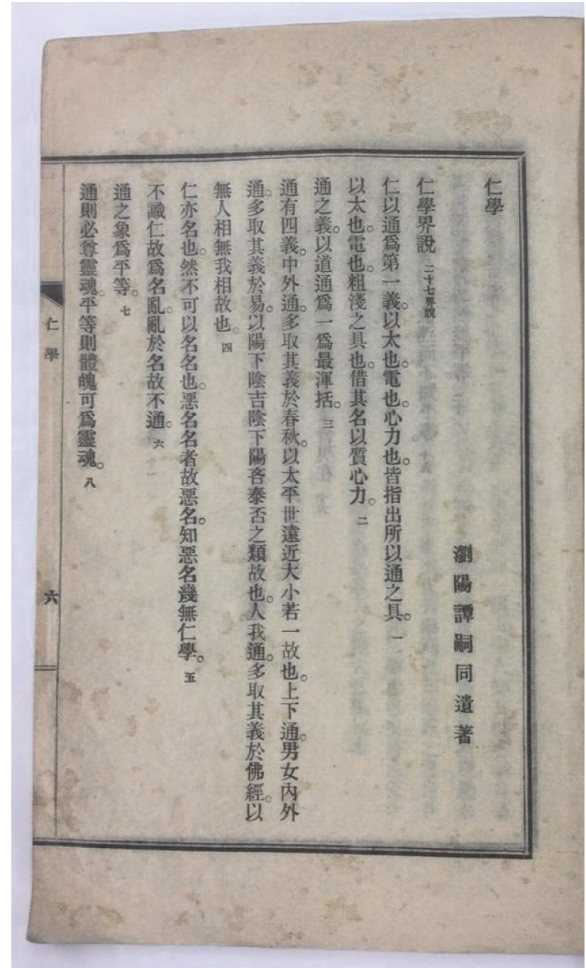


# 『仁学』と戢翼翬<sup>シュウヨクキ</sup>をめぐって

小池 直（資料管理課）



左：【写真 1】『仁学』表紙。 右：【写真 2】『仁学』巻首。

『仁学』2巻1冊。形態：外寸 22.0 × 14.9 cm/ 四周双边無界（本文を囲む枠線が四辺とも二重で、行間に線が引かれていない）/ 每半葉 13 行 33 字/ 白口単黒魚尾（版面中央折り目部分にあたる版心は、上下が黒く塗られておらず黒い尾鰭型の印が一つある）/ 内匡郭（枠線内側の長さ）16.6 × 11.3 cm。

## ◆はじめに

筆者は 2017 年 6 月 5 ～ 9 日及び 9 月 4 ～ 8 日にわたり東京大学東洋文化研究所で開催された、「漢籍整理長期研修」に参加した。本稿はその報告に代えて、研修最終日の発表で筆者が取り上げた資料、譚嗣同『仁学』（国民報社 1901。請求記号 ロ 11-249）とその寄贈者、戢翼翬（シュウ ヨクキ）について紹介する。

## ◆『仁学』について

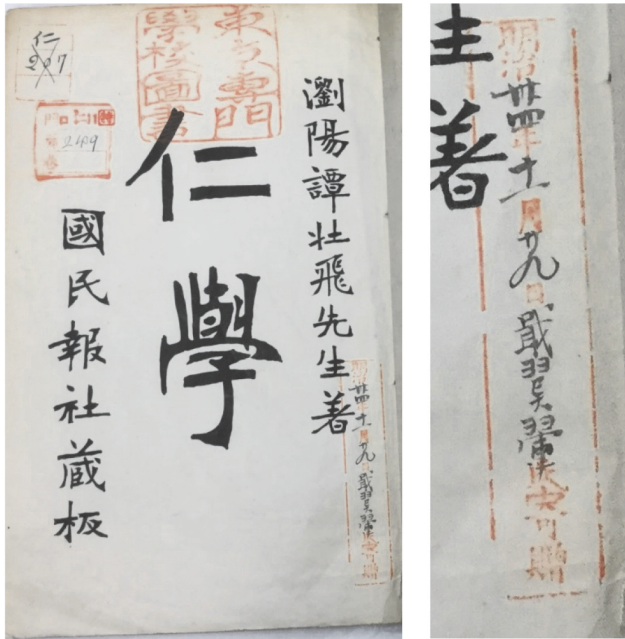
6 月の研修前半が終了し、後半最終日の発表に向けての課

題として、各自の勤務先にある漢籍についてデータシート及び解題の作成が課せられた。筆者は業務の中でたまたま本書を見つけ、興味をそそられて課題図書に選んだ。

『仁学』は清末の学者・政治家の譚嗣同（1865-1898）の撰。岩波文庫版の「解説」の言を借りれば、「数千年という時間の幅において、人間と宇宙の根源、社会の束縛の由来を追跡し、その束縛を突破しようという、実に規模壮大な構想で著された」という（註 1）。「以太」（エーテル）という概念を軸に、哲学・道徳・政治論から科学技術や具体的な社会批判など、極めて幅広く論及した独特な内容の書である。







左：【写真5】『仁学』封面（タイトルページ）。「瀏陽」は譚嗣同の出身地（現湖南省長沙市瀏陽市）、「壯飛」は譚嗣同の号。  
右：【写真6】封面右下の記載。「明治卅四年十一月廿九日戢翼翬氏寄贈」とある。

国民報社版『仁学』には再刊本や海賊本が存在する。館蔵本がまぎれもなく1901年10月刊行の最初の単行本と判断できるのは、明治34年（1901）11月29日、戢翼翬氏寄贈と封面に記載があるからである（【写真6】参照）。筆者が当資料に関心を持ったのは、まさにこの寄贈記録の故である。

#### ◆戢翼翬について

戢翼翬は当時、東京専門学校在学中の留学生で、国民報社にも参加していた。戢翼翬の生年は、通説によれば光緒4年（1878）である。明治29年（1896）、清国総理衙門派遣の留学生の一人として来日、日本語を学んだ上で、明治32年（1899）9月、ともに来日した留学生の一人である唐宝鏐（トウ ホウ ガク、1873-1953。清末民国初期の政治家）と共に東京専門学校に入学した。この2名が本学初の清国留学生である。戢翼翬は留学中に東京亡命中の孫文とも接触し、革命派として政治活動を行っていた。在日留学生中で最も激烈に“排満”を唱えていた内の一人だといわれている。

#### ◆義和団事件勃発

戢翼翬が東京専門学校に在学中の光緒26年（1900）、義和団事件が勃発する。ドイツが権益を有する山東省を中心におこった義和団は、「興清滅洋」を唱えて各地で清国人キリスト教徒や外国人を襲撃していた。列国政府は清国に対しその鎮

圧を強く要求したが、清国側は列強への反感から義和団に同情的な者が多く、消極的な対応であった。こうした状況で義和団の規模は膨れ上がり、列国は軍事介入に踏み切る。対して清国側では、主流派である西太后ら守旧派によって列国への宣戦布告が決せられ、同年6月、清国正規軍は義和団とともに北京の公使館区域を包囲した。日本を含む8カ国は連合軍を組織し、8月に北京を攻撃、占拠した。西太后は光緒帝を連れて西安へ逃げ去り、守旧派は失脚、洋務派官僚により列国との講和交渉が行われ、列国間の利害調整に難航した末、翌1901年9月に巨額の賠償を含む講話が締結された。

#### ◆自立軍の武装蜂起

この間、譚嗣同の友人であり、戊戌変法の失敗により日本へ亡命し、後に帰国して長江流域で政治活動をしていた唐才常（1867-1900）が、漢口において自立軍を組織、光緒帝の救出を掲げて武装蜂起した。戢翼翬はこの自立軍に参加するために1900年夏に帰国、7月に武装蜂起が失敗に終ると再び日本に戻った。

自立軍蜂起の失敗は、支援物資の遅配による所が大きい。当初、康有為・梁啓超の一派は、自立軍蜂起に計画段階から関わり、全力を挙げて支援活動を進めた。康有為と梁啓超は各国の華僑組織に働きかけ、資金集めに奔走した。ところが、せっかく集めた資金は唐才常の元に届かず、準備が整わぬうちに蜂起せざるを得なくなったのである。

#### ◆2つの事件の余波

この件は、責任者である康有為の声望を大きく貶めた。また梁啓超も、本来陣頭に立って指揮すべき康有為の煮え切らぬ態度に不信を募らせる結果となった。

義和団事件における、清朝政府の極めて拙い対応は、清王朝の威信を失墜させ、あくまで清朝内部での政治改革を目指す康有為・梁啓超らの言論の説得力を大きく損ねた。以後、改革派に代って革命派が、知識人たちの賛同を獲得してゆくことになる。

#### ◆戢翼翬の執筆活動

日本に戻った戢翼翬は東京専門学校に復学すると、1900年12月、雑誌『訳書彙編』の発行を開始した。革命派の留学生たちによる編集で、その名の通り日本語書籍の翻訳を掲載する雑誌である。いま呉相湘主編『中国史学叢書』49（台湾学生書局1966.9）にその一部を収める。その第1期をしてみる

と、日本人の著した政治学書とともに「万法精理 法国 孟德斯鳩著」（モンテスキュー『法的精神』）など西洋人の著作も並ぶが、これらも日本語訳からの重訳であろう。

日本語書籍の翻訳は、革命派にとって重要な活動であった。『訳書彙編』巻末の広告欄に『和文漢読法』という書籍の広告が載っている。これは梁啓超が日本に来て間もなく著したもので、漢文訓読をヒントに、日本語文章の中の漢字にのみ注目し、これを下から上に読む、というものである。『訳書彙編』巻末（第2期からは巻頭）の「簡啓」に、日本は「同文」（同じく漢字を使用する国）のため学びやすいこと、日本では大量の書籍が出版されていることが記されている。要するに、西洋近代を取入れた日本の書籍を手取り早く読んで、その成果を養分として吸収し、政治活動のための理論武装をしよう、というものである。もっともこの頃には和文漢読の手法だけではもはや足りなくなっており、戡翼輩はともに留学した唐宝鏐と共著で日本語学習書『東語正規』（譯書彙編社1900.7）を出版している。『和文漢読法』も『東語正規』も、留学生の間で飛ぶように売れたそうである。

#### ◆『仁学』関係者その後

先述のとおり、館蔵『仁学』は国民報社から1901年10月に発刊された。国民報社の主宰者は秦力山（1877-1906）で、戡翼輩もその社員であった。主宰者の秦力山は、梁啓超に呼ばれて留学生として日本に来たが、自立軍蜂起に参加して、それが失敗に終ると、康有為に失望して革命派となった人物である。国民報社は1901年5月から『国民報』を発刊したが、その広告が1900年12月刊の『訳書彙編』第1期に掲載されているので、その頃にはもう活動を開始していたらしい。

『仁学』原稿を所持していた梁啓超が、旧知とは言え上記のような経緯で革命派となった人物の主宰する出版社から『仁学』を出した理由は不明である。ただ、少なくとも梁啓超と康有為の関係のゆらぎを反映しているものと言うことはできよう。なお康有為は辛亥革命後も立憲君主制を主張し続け、1917年にラストエンペラー溥儀が一時的に復位する事件にも関与し、またあくまで儒学の經典である經書の解釈を以て自己の思想を表明するという、伝統的なスタイルを晩年まで堅持している。対して梁啓超は辛亥革命後あっさり「民主立憲」を是認し、皇帝復位にはこれに反抗して戦い、儒家の經典を思考の根底に据える康有為に疑問を呈している。

#### ◆戡翼輩の本学卒業について

さて戡翼輩の卒業について、『早稲田大学百年史』では「彼は学苑を卒業するまでに至っておらず、三十八年に推選校友に挙げられたというのが正しい」として、中退したことを述べている（註2）。ただ、彼が1902年7月に邦語政治科を卒業していることは確かであるらしい（註3）。1902年9月に東京専門学校から早稲田大学に変わった時、邦語政治科は専門部政治経済科となり、英語政治科が大学部政治経済学科となった。このため、あくまで専門部の卒業とされ、「大学」の卒業生とは見做されなかったのだろう。

#### ◆むすび

その後の戡翼輩について述べ、本稿を終えたい。1902年に帰国した戡翼輩は、上海で実践女子大学設立者の下田歌子と知り合い、ともに作新社という出版社を設立。その後1905年に唐宝鏐ら留学生たちとともに「進士」に及第、つまり科挙の合格者という扱いとなる。同年外交官として再来日、帰国後は改革派の大臣を通じて立憲政治の実現を目指すも、1907年、恃みとしていた大臣が袁世凱により失脚させられると、戡翼輩も革命党との関係を弾劾されて地位を剥奪された。翌1908年、武昌の自宅にて死去。中華民国成立の4年前であった。

#### 【註】

- (1) 西順蔵・坂元ひろ子訳『仁学：清末の社会変革論』岩波書店1989.8、p.262。
- (2) 『早稲田大学百年史』早稲田大学出版部1978.3、pp.923-924。
- (3) 紀旭峰「戦前期早稲田大学のアジア人留学生の軌跡——中国人と台湾人留学生数の動向を中心に」李成市・劉傑編『留学生の早稲田：近代日本の知の接触領域』早稲田大学出版部2015.12、pp.80-81。

#### 【参考文献】

- ◎狭間直樹「譚嗣同『仁学』の刊行と梁啓超」『東方學』2005.7
- ◎狭間直樹『梁啓超 東アジア文明史の転換』岩波書店2016.4
- ◎竹内弘行『後期康有為論：亡命・辛亥・復辟・五四』同朋舎1987.10
- 宮城由美子『『国民報』社説にみる国家と国民について』『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』2009.3
- 范鉄権・孔祥吉「革命党人戡翼輩重要史実述考」  
[http://www.cssn.cn/lxs/201405/t20140519\\_1175727\\_3.shtml](http://www.cssn.cn/lxs/201405/t20140519_1175727_3.shtml) (2018.1.20 閲覧)